

トマソン展～都市の幽霊との出会い～

著者	荒岡 陽
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	13
ページ	213-221
発行年	2012-04
URL	http://hdl.handle.net/10114/7060

トマソン展 ～都市の幽霊との出会い～

国際文化学部4年 山下ゼミ

荒岡 陽

幽霊というものを題材にしたせいか、発表当日までの間ゼミ生たちの周りで様々な怪奇現象が起きた。発表が散々貶される悪夢をゼミ長が何度も見たり、設計図通りに作っているはずの模型のパーツが不足してしまったり。ヘリオスで作業中に強烈な臭気に苦しめられるということもあった。携帯の充電もなぜか切れがちだった。

このように、昔から小説や映画などで出てくる幽霊は人を脅かし苦しめる存在として登場してくることが多いが、私たちの発表で扱う幽霊はそういった存在ではなく、都市に彩りを与え、日常を豊かにしてくれる存在である。

トマソンという、四番打者なのに全く打たなくなってしまった元メジャーリーガーの名前が由来のこの幽霊は、登った先に何もない階段や、開けた先に足場の無い扉といった、それ自体の機能は生きているにもかかわらず目的・意味を失くし、無用となってしまった存在である。

トマソンは都市の変化によって生まれ、都市の変化に置き去りにされる。私たちは意識することで初めてその存在に気づくことができ、そ

うしたありかたがまさに都市の幽霊であると言える。

ネオ・ダダ運動や千円札裁判などで知られる芸術家、赤瀬川原平が発見・提唱したこのトマソンを題材として、模型、映像、ポスターの展示を行ったのが私たちの発表である。ただ展示を行うだけではなく内装にもこだわり、空間を使って魅せる作品を目指した。

発表準備にあたって班を四つに分け準備を進めていったのだが、以下に各班の準備の記録を記載する。

1. フィールドワーク班

準備にあたって、まずそれぞれの街でトマソンを一つ以上見つけてこい、という大雑把な課題がゼミ長から出されたが案の定なかなか見つからず、別にフィールドワーク班を作り、神楽坂でもトマソン探しを行うことにした。

坂を登り始めてすぐ、路地の方がトマソンがありそうだという理由で不二家の横にある路地に入る。そこでさっそく見つかったのが、火事でほぼ全焼した建物になぜかきれいな看板が付いているという物件である。この物件は後に議論になり、かろうじて店が経営しているのなら看板はその役割を果たしているからトマソンではないが、店が経営していないのなら看板は無用な存在、すなわちトマソンであるという結論に至った。

神楽坂ではもう一つ、トマソンを発見することに成功した。大通りの

中腹辺りにある松屋やカラオケがあるテナントである。この建物の二階にはバルコニーがあるのだが、そこに至る扉がないのである。そのバルコニーに行くためには外側からはしごなどを使って登るしか手段がなく、まさに無用な存在となっていた。見事なトマソンだが、発見したゼミ生は「目ざとい」という不名誉な評価を得ていた・・・。

その後いくつかのトマソンらしき物件を発見してフィールドワークは終わったが、記憶に残っているのはおしゃれなイタリアンレストランやワニ肉が食べられるというアフロ・フレンチのレストランやラーメン屋など……。とにかくお腹のすくフィールドワークであったことは間違いない。



◀ 看板だけが全く焼けていない



▶ 防音壁がバルコニーを孤立させている

2. 模型班

今回インスタレーションで展示した模型は四点。三つの個人製作と、トマソン・タウンという共同作品が一つである。トマソン・タウンは三つのトマソン物件、そしてすべての面にトマソンが存在するという「山下セミナーハウス」という名前の建物で構成された。トマソン・タウンの製作にあたってはボアソナードの一階ヘリオスに陣取り、周りから不審な目で見られながらも作業に没頭した。

模型制作にあたっては設計図を書くことから始め、あたかも建築科の学生のように作業を進めていった。作業に疲れた時は、人目もはばからず大音量でクリスマスソングメドレーを流すことによって士気を高めていた。



模型作りに没頭するゼミ生、笑顔



完成したトマソン・タウンを撮影しまくるゼミ生の図

トマソン・タウンには階段が多いのだが、その階段一つ一つが実に細かい作業の連続で作られている。誤差が少しでもあれば不細工になってしまうから、慎重にサイズを測りながら作っていかなければいけず、間違えたときには精神的にかなりのダメージがあり、発狂寸前の者もいたようだ。

模型完成までの数日、ほぼ毎日学校が閉まるまでヘリオスで作業をしていたが、こうした苦闘の日々を経て完成した模型はゼミ生全員にとって満足 of いく作品となった。あまりに愛着がわきすぎて何度もカメラで撮影してしまうものが続出した。

3. 映像班

映像班はゼミ長の「なんか映像もあったほうがいいんじゃないか」という適当な気持ちで作られた班なので、最初のうちはどの方向に向かっていけばいいのか全くわからなかった。その点に関してゼミ長はとても反省しているので許してあげてほしい。

映像を作るにあたって「都市、幽霊、儚さ」といったキーワードが与えられ、それをもとに各人でデモを用意し、意見の交換をしながら一つの作品を作るといったスタイルがとられた。

素材として使用するトマソンの写真が出揃うのがだいぶ遅れたり、情報カフェの暖房が利きすぎたりといったことに苦しまれながらも、なんとか当日までに完成を迎え、トマソンと上記のキーワードを結びつけた映像を上映することができた。

4. 内装班

内装班は模型や映像などとの折り合いを考えながら作業を進めなくてはならなかった。部屋を明るくするのか、暗くするのか、実際の美術展での展示なども参考にしながらアイデアがまとめられていった。

白いシートを黒いスプレーでむらがあるように染め、模型の展示にしようとしたのだが、抽象画に目がないゼミ長はそのシート自体が作品だと主張し内装班の準備を邪魔していた。展示が終わった後のシートは、今はゼミ長の部屋の天井に大切に飾ってあるらしい……。



ゼミ長が絶賛したシーツ

部屋を暗くし、照明を青くするというアイデアが功を奏し、都市の幽霊というイメージ通りの空間を演出することができた。また、なんの色も付いていなかった白い模型に青い光があたり、幽霊の持つ悲しさや虚しさ、儚さといったイメージが模型にも表現された。

こうして完成されたインスタレーションは、各班別々に準備したのにも関わらずそれぞれがそれぞれの魅力を高める相乗効果が生まれていた。内装、模型、映像、どれか一つが欠けても展示は失敗だったと思われる。

・・・・・・以上がトマソン展発表当日までの記録である。

記録、といえば、幽霊が人の記憶を呼び起させる存在であるようにト



実際の展示風景、白黒ではわかりにくいかもしれないが、青白い光が模型を照らしている

マソンもまた都市に刻まれた記憶を喚起させる存在であるといえる。というのは、トマソンは都市の変化で生じたズレであると同時にその変化の歴史を見せるものでもあるからだ。

どのようにしてそのトマソンが生まれたのか、それを探ることは、都市の変化の歴史をたどることでもある。そして、トマソンの見せるそうした都市の歴史やその純粋な滑稽さは街歩きをより面白くする。トマソンとは、都市の変化に置き去りにされた幽霊であり、無意味な存在であるが、都市に彩りを加える存在でもあるのだ。

そして、今回の発表で私たちが提供したのは、日常に対する新たな視点である。芸術作品として作られたものではないものを芸術として観る超芸術的視点。その視点があれば、私たちの日常はもっと楽しくなる。そのことに気づいていただけたのなら、今回の発表は本当の意味

で成功したといえるだろう。

最後に、実際に展示に来てくれたみなさんや審査をしてくださった教授や学生スタッフのみなさんに心から感謝します。また、温かい目でゼミ生の活動を見守っていただいた山下誠先生、そしてゼミ長の暴走・空回りにあきれながらもついてきてくれたゼミ生のみんなにも感謝します。下の写真のような笑顔が生まれたのはみなさんのおかげです。本当にありがとうございました！

